

壮麗なアンコール美術の精華を一堂に

石澤良昭（上智大学学長）

アンコール美術の精華を一堂に

アンコール美術は「東南アジアにおけるギリシア美術」とも言われる。その図像、浮彫り、造像、配置、構図など、どれも世界に冠たる美術であり、7世紀の「ドゥルガー女神像」はギリシア美術の逸品「ミロのヴィーナス」を超えるものがあると言われてきた。

今回展示される82点の美術品は、かつてアンコール・ワット、アンコール・トムなど壮大な大伽藍の祠堂の中に安置され崇められてきた神々の彫像であり、仏像である。千年あまりの年月を経てきた最高の傑作であり、美の極致でもある。それらは今も、時を超え、民族を越えて多くの人々に共感を呼び起こし、深い感動を与えてきた。本展覧会はまさにアンコール美術の精華を一堂に集め、本邦初公開の作品が多く含まれている。時代は6世紀から15世紀までの約1000年間に及ぶ最高の美術作品が鑑賞できる。



アンコール王朝時代ではアンコール・ワットなどの壮麗な石遠大伽藍が世界的に有名である。同時にそうした各塔堂や寺院・僧院にはこれらの神々の彫像や仏像が安置され、日夜灯明が灯り、当時の人々は渴仰敬神かつごうけいしんの生活を送り、輪廻りんね転生てんしょうを信じていたのであった。いわば、クメール人の信仰の証を具現したものがこれらの彫像である。

本書ではそのクメール彫像の全体的な流れを提示し、そしてその力強い独創性と溢れる命の臨在感を踏まえ、着実な美意識の展開を時代に沿って例示していきたいと思う。

美術というものは生き続けているものであり、その生命力の持続は半永久的なものである。一つの様式がその美術史の流れの中で終焉を迎えようとする時に、その様式の中には次代の新しい様式を開花させるための「核」になる表現要素をいつも萌芽として内包しているものである。

その新しい美術は、少なくとも初期の段階においては先行した時代のいくつかの表現形式をそのまま継承していると言える。

アンコール美術は生き続ける

ベトナム北部を除き、東南アジアは全域にわたってインド文化の影響を受けてきた。カンボジアは紀元前後から海路を通じてインドから種々の文化的要素を受容してきた。そのインド化の波こそが、その後に展開する独創的なクメール文明に「にがり」を与えてくれているのである。インドからの種々の物的精神的影響に加えて、さらに遠く西方のローマ世界とも海路を通じてつながっていた。

カンボジアの国家統一事業は、幾多の紆余曲折を経ながら 9 世紀初めにジャヤヴァルマン 2 世によって部分的に成し遂げられた。王は、カンボジア全土ではないがトンレ・サープ湖の北西部地方をその勢力下におさめた。この地方がやがてクメール民族の興隆発展の地になっていくのである。ヤショヴァルマン 1 世も、900 年頃にその旧都城からアンコールの新都城第一次ヤショダラプラへと移り住んだ。このアンコールの地は、約 600 年にわたりアンコール諸王が都城を営み続け、ヤショダラプラ（ヤショヴァルマン王の都城の意味）の名をそのまま受け継いできた。

そしてアンコールの地には諸王による大建造物が次々と建立されていくのである。9 世紀後半には東メボン寺院やプレ・ループ寺院が、10 世紀末頃から 11 世紀初めにかけてはビミヤナカス寺院やタ・ケウ寺院が、11 世紀に入るとバブ

ーオン寺院が建立された。なかでも 12 世紀のアンコー・ワットはクメール建造物の最高傑作であり、スールヤヴァルマン 2 世の強盛な権力の象徴でもあった。

ジャヤヴァルマン 7 世はチャンパー軍の侵略を駆逐した後に、バイヨン寺院を中心を中心にしたアンコール・トムを建設アンコール・トムを建設した。王は 1181 年から 1218 年頃までにその版図を最大限(インドシナ半島のほぼ全域)にまで拡張し、国内各地に寺院を建立した。さらに生活に必要な諸施設を整備した。例えば灌漑貯水池、道路、橋梁、宿駅、施療院などである。

ジャヤヴァルマン 7 世は最後の偉大なる建設王であった。この王の死後まもなく王位継承争いから廃仏事件が起こった。2001 年上智大学アンコール遺跡国際調査団は、仏教寺院がバンテイア・クデイから 274 体の廃仏と千体仏石柱を発掘し、世紀の大発見となった。この大発見により、アンコール王朝末期にも政治が機能し、繁栄を持続していたことが判明した。その都城は 1296 年にカンボジアを訪れた中国人周達観しゅうたつかんが感嘆したように、13 世紀末にもなお栄光を保持し続けていた。しかし 15 世紀半ば、クメール王国はタイ人のアユタヤ王朝の拡大に抗しきれず、1431 年頃ついに由緒あるアンコール都城を放棄せざるを得なくなった。

アンコール王朝の宗教と美術

アンコール美術は宗教美術であると言っても過言ではない。古代カンボジアでは、インド文明が創り出したヒンドゥー教と仏教という二つの宗教が伝来していた。どちらも行きとし生けるものの輪廻転生の教理を基盤とし、さらに解脱へ向かって独自の道を希求しようとする宗教である。

ヒンドゥー教はブラフマー神、ヴィシュヌ神、シヴァ神の三神を中心に形成され、多数の神々が合祀併存している。ヴィシュヌ神は護持神であり、世界救済の神でもある。一つの頭と 4 本の手で造像されている。ヴィシュヌ神は宇宙創世の度ごとに不滅の大蛇の上に横だわって眠り、その間に宇宙が創造されるのである。そして目覚める度に異なった姿相で現れてくる。これらの「アヴァターラ（権化）」の一つにクリシュナ神がある。クリシュナ神は人を惑わす牧童であり、人を魅了する怪力の持ち生でもある。

シヴァ神は世界の創道生であり、守護者であり、また破壊者でもある。この神は一つまたは五つの顔を持ち、2 本もしくは多数の手を持っている。その顔額には第三の目が縦についていて、髪容は一般に高い髪髻はつきよくに結い上げられ、三日月が飾られている。この神は多様な役柄をもっているために様々な姿相で描か

れるが、カンボジアではシヴァ神はとりわけ象徴的な「リング（男根）」の形で表されることが多い。

こうした神々に加勢する形で、多くは神のエネルギーを権化となし、女性の姿相で登場するのが配偶神＝神妃（シャクティ〈神の力、性力〉）である。ヴィシュヌ神のシャクティはシュリー、ラクシュミー（吉祥天）などであり、シヴァ神のシャクティはパールヴァティ、ウマー、ドゥルガー、カーリーなどである。シャクティは守護者もしくは破壊者としての神力を示し、時には柔和な形相に、時には恐ろしい形相になるのであった。

ヒンドゥー教にはほかに陪神、護世神として描かれる神々がいる。シヴァ神の息子で象の頭を持った智慧と幸運の神ガネーシャ、同じくシヴァ神の息子で戦いの神スカンダなどである。元来は至上神で雨を降らす雷霆神インドラ（帝釈天）は、第二義的な神々の中で首位を占めている。さらに太陽神スーリヤなどがある。

神々の中にはその他にほとんど目立たないが数多くの神々がいる。さらに寺院の装飾の中で重要な役割を果たしてきた半神たち、英雄や精霊も挙げなければならない。例えば、デヴァ（神）とデヴァター（女神）、ヤクシャ（夜叉＝羅刹）、アスラ（阿修羅）、アプサラス（天女）、ナーガ（蛇神）とナーギー（女蛇神）などである。

アンコール王朝における仏教とヒンドゥー教

仏教は仏伝とその教説の中で全ての人々に解脱の可能性を説いている。この教理は早くから二つの大宗派を発展させてきた。その一つは上座仏教（小乗仏教）であり、それはパーリ語を用い、スリランカやミャンマー・タイ・ラオス・カンボジアで現在も信仰されている。梵語を用いる小乗仏教もあった。もう一つは大乗仏教であった。北伝（ネパール、チベット、中国、日本など）仏教とも言われている。

上座仏教の教理は不可知論的であり、篤信者への宣教として仏伝とブッダ（仏陀）の姿を提示するだけである。一方の大乗仏教はその教理の哲学的側面を発展させていったものであり、歴史上のブッダをボディサットヴァ（菩薩）あるいは未来仏、禪定仏など一連の流れの中に位置づけている。

カンボジアでは大乗仏教は、7世紀から8世紀にかけて伸張したようであるが、9世紀から王宮内では守護精霊を含むデヴァラージャ（神王）信仰の祭祀が定着し、逆に仏教が公式な場所から姿を消していった。代わってヒンドゥー教シヴ

ア派の重要性が増大してくる。アンコール王朝では仏教はその後数百年間にわたり全く黙過されるような状況で細々と存続していたようである。ヴィシュヌ派は、多くの彫像や重要な寺院の建立が証明するように大きな勢力を保持し続け、スールヤヴァルマン 2 世の治世下でとりわけ権勢を誇った。そのような宗教背景の状況下でアンコール・ワットが建立されたのであった。

その後ジャヤヴァルマンヴァルマン 7 世の時代になると、大乘仏教がこの王の熱烈な信仰心と強烈な個性に導かれて興隆発展した。約 40 年間ではあるが大乘仏教が全盛をきわめた。しかしジャヤヴァルマン 7 世の統治が終わった後、王位継承戦争をきっかけにシヴァ派らの反発が起き、仏像の打ち壊しが行われた。13 世紀末からスリランカとの往来の結果、カンボジアは最終的にはパーリ語の上座仏教を採ることとなった。

アンコール美術の発展史

インドから図像要素を受容しているにもかかわらず、クメール彫像は全体として独白の傾向を見せている。カンボジアの彫像ではヒンドゥー教が持つ恐怖、肉欲、不気味さといった国像表現を遠ざけようとしてきた。

ヴィシュヌ神は 4 本の手を持った姿で表され、持物は梶棒、法螺貝、シャクラ（車輪型の武器）、珠である。この神は主にアヴァターラ（権化）で表される。

シヴァ神は一つの顔と 2 本の手を持った姿で表される。しかしターンヴァという宇宙世界での踊りを再現する場合は例外である。またクメール図像のシヴァ神は象徴的なリング(男根)の形で表されることが最も多い。

さらにシヴァ神はヴィシュヌ神と合体してハリハラ神となる。ハリハラ神は右半分がシヴァ神、左半分がヴィシュヌ神の姿となっている。

彫像で表現されたブッダは、法衣ほうえを着て宝飾類で身を飾っていることが多く、さらに王冠髪飾りをつけていたりする。ブッダは七ツ頭のナーガ(蛇神)がとぐろを巻いた上に座した姿で描かれ、カンボジアではそうした座仏像が好まれている。このナーガは大きくその鎌首をもち上げて、禪定するブッダを守っている。

大乘仏教において本殿に安置される仏像は、ロケシュヴァラかんぜおんぼさつ（観世音菩薩）、ボディサットヴァほんにやなみらみつたぼさつ（菩薩）、プラジューナーパーラミタ（般若波羅蜜多菩薩）、ターラーたらぼさつ（多羅菩薩）などである。これらの仏像はいずれもヒンドゥー教の神々と同じ衣装を着け、髪の前部に禪定姿の小座仏像けぶつ（化仏）を描いていた。

ロケシュヴァラは 4 本の手を持った姿で表され、持物は小瓶、経典、数珠、蓮華の蕾である。8 本の手を持った彫像も見られる。その胴体や螺髪らほつには多くの

小仏像や小神像が描かれている。小仏像は菩薩が人間の救済のために遣わしたものとみなされている。クーラーは一般に丸彫りの簡素な様式で遣像され、2本の手に経典と1本または2本の蓮華の蕾を持っている。

アンコール美術では相対立する思想に立脚した2度にわたる頂点があった。第1の頂点はごく初期の6世紀から8世紀にかけて、カンボジア南部において栄えたプノンダ美術様式である。第2の頂点は12世紀頃から13世紀初めにかけてであり、これをバイヨン様式という。

こうした2度にわたる頂点の間には、数多くの美術様式が存続し、さらに過渡期時代もあった。クメール美術は、ある時は自然主義的傾向を強め、またある時は宗教伝統主義に傾き、より柔和なものになったり、より冷ややかなものになったり、典雅な傾向に傾いたり、きらびやかな装身具をつけたり、大きく揺れ動いてきた。

バンテアイ・スレイ様式では優美典雅な革新的傾向を見せていた。11世紀には簡素、繊細や気品を求める傾向があるバプーオン様式があった。アンコール・ワット様式は装飾的美術傾向を強め、彫像を宝石や王冠髪飾りで飾りたてた。ジャヤバルマン7世時代は内面の精神を追究し、最も追真性あふれる美しい造形作品を創り出していた。